

## アリストテレスのフュシスに就いて

松本厚

アリストテレスが自然的存在として挙げてゐるものは

單純物體と名稱されてゐる火・氣・水・土の基本物體要素とこれらから合成されたものとされる動物及びその諸部分と全宇宙及びその諸部分である（二形而上學一Ⅷノ一〇四二a7—11）（一自然原論一Ⅱノ一九二b8—12）

（宇宙論一Ⅷノ二九八a27—32）。アリストテレスはこ

れら存在の由りて存する原因乃至原理を探究するその自然學を其他の理論學である數學や第一哲學と區別する主要な點は數學や第一哲學の問題とする存在は何れも夫々の意味で動かぬものであるのに自然學が問題にする存在は動くものである事にある（二形而上學一Ⅴ1）。自然的存在は動くものである。それは生成消滅・増大減少・質變化し場所的に運動する。これら諸變化をアリストテレスは廣義に動と呼んでゐるのであるが、これら自然的存在はアリストテレスに由ればその動く原因

アリストテレスのフュシスに就いて

を自らの中に有する。斯く自然的存在に内存すると考へられた動の原因をアリストテレスは自然と呼んでゐるのである。自然は動き靜る事の原因乃至原理であり、それは自然的存在に附帶的にでなく本來的に斯かる原因として内存すると言はれてゐる（一自然原論一Ⅱノ一九二b21—23）。又斯様な原理を持つものが自然を持つと言はれ、斯く自然を持つものは凡て基體的なものとしての存在であるとされ、斯かる存在に附帶的にでなく本來的に生起する事は自然に依つて起る事である。例へば火が上方に運動する事は自然に依りて起る事であるが、併しそれは自然ではないと言はれ自然は原因乃至原理性として現實の一々の存在やそれに本來起る諸變化即ち謂はゞ現象から明確に區別される（同上、一九二b32—一九三a1）。

以上の如くアリストテレスは自然を自然的存在に本來内存する動の原因として定義するのであるが、アリストテレスは自然的存在の生成變化運動のみならず人間技術

的活動も矢張り動の名のみに呼ぶのである。自然的存在を上述の如く自らの中に動の原理を有するものと規定したのは人間技術に依る存在に對してであつて技術から成るもの、例へば家屋や臥臺や衣服といふが如き類はその變化の發動を本性中に有せず他のものの中に外から有する（自然原論 II / 一九二下 16—30）。斯かる點に自然的存在と技術的存在との區別を明にしてゐるのであるが、斯く兩者を並べて區別してゐるといふ事は實はアリストテレスにとりて兩者が甚だ近接に考へられてゐる事であつてアリストテレスが動といふ事を考察する際殆ど兩者を區別してはゐない。存在の原理の上からも運動の論理の上からも兩者を殆ど同様に把握してゐる。自然的運動の秩序と技術的運動の秩序とを同一の論理を以て把握してゐるといふ事はアリストテレスの事物把握の根本に見出される二つの顯著な事柄と考へられる。

## 二

周知の如くアリストテレスは存在に素材・形相・目的・運動因の四原理を考へるが、これらは主として自然的存在に就いて考へられてゐるのであつて、且それを常に技術的存在と並せ考へる事に由りて把握してゐるのである。そこでは技術的存在も同じくこれらの原理を以て把握さ

れてをり自然的存在の考察でありながら技術的存在を例にとつて考察し恰も兩者區別なき如くである事も屢々である。それはこれらの原理が兩者に殆ど同様に考へられてゐるからであると解される。

アリストテレスが自然的存在は素材から成るとなす事は臥臺が木材から彫像が銅から成ると考へると異るところはないのであり、又自然的存在は單に素材ではなく一定の形相を得て始めて現實的存在と成ると考へる事も技術的存在に於けると同じに考へられてゐるのである。木材は單に木材である限り臥臺に成る事は可能であり、従つて可能的に臥臺であるとは言はれ得ても臥臺の形相を現實に持たぬ限り未だ臥臺としての存在ではない。同様にして自然的に成立するものに於ても夫々の存在が何であるかを規定する言葉に即した形相を取らぬ限り夫々の素材は單に存在の可能態に過ぎないと考へる（自然原論 II / 一九三 a 34—b 3）。

且アリストテレスが存在が何であるかを定める言葉即ち形相となすものは單にそのものの外形や色彩ではなくそのもの存在がその爲にあるその存在の例であり用である。アリストテレスに由れば死者は同じ外形を有しても最早人間ではない。生物體はそれを働かせてゐ

「魂」が去れば生物ではなくその諸部分も石化したものの如く外形が残るのみである。死者の諸肢體諸器官その眼や手は銅製や木製の手、石製の筍、繪の中の醫者と同じくそれらは凡て夫々の名で呼ばれるにしても實のそれらでないのは夫々自己の働をなし能はぬからである。用具はその用の爲に生物體の諸部分は各々が本性それに關つてゐる働の爲に存する。鋸は挽き切る爲に、眼は見る爲に、肉體は魂の爲に存するとなす（動物體論 I 170、Iノ六四〇b 29—六四一a 7（同上 Iノ六四五b 14—120、六四五b 33—六四六a 1）。斯く存在形相をなすは存在がその爲に存する働であり用であると考へられてゐる事に於ても自然的存在は技術的存在と殆ど同様に把握されてゐると言へる。

更に又アリストテレスに於て形相と素材は各々獨立した原理ではあつても存在に於て兩者が無關係に考へられてゐるのではなく素材は形相に關係的に考へられる。「素材は關係的なものに屬し形相に應じて異なる」（「自然原論」II 2—194b 9）と言はれてゐるが、この事に於いても自然的存在は技術的存在と同様に把握されてゐる。建てるべき家が如何なるものであるかといふ事が如何

アリストテレスのフュシスに就いて

なるものが必要であるかを定めると同様に人間が何であるかといふ事がその爲には何が存せねばならぬかといふ事を定めてくる。例へば人間が動物の中で最も智慧あるものであるといふ事がその爲に手が存せねばならぬといふ事を定めてゐると考へる（動物體論 IV 10 六八七a 8—23）如くである。それは恰も鋸の働が挽き切る事にあると定まれば如何なる齒を持つ事が必要か？定まり、更にそれに由りそれが鐵から成らねばならぬといふ事が定まつてくるといふに同じに考へられるのである（「自然原論」II 9 二〇〇b 1—8）。

「自然は二義である。一つには形相であり一つには素材である」（「自然原論」II 2—194a 12）（「動物體論」I 164—165—27）と言はれてゐる如く自然的存在の原理として自然は形相・素材の二つに於いて考へられるが、これら存在の原理性に關して自然的存在は技術的存在と同様に把握されてゐる事上述せる如くである。而してアリストテレスにとりては本來動くものとされるこれら存在に關し存在の原理は同時に生成運動の原理である。第一に素材は生成變化の基礎であり、存在と非存在の可能性として生成變化がそれに由り可能なる原理として考

へられる。「自然に依るものによせよ技術に依るものによせよ生成するものは凡て素材を持つ。蓋、それらの各々、は存する事と存せぬ事の可能なものであり、その事が各々に於ける素材である」(形而上學 VI 7 一〇三二a 20—22)と言はれてゐる。素材は前述の如く形成の素材として存在形相に關係的に考へられるのであつても、斯く生成がそれに於いて可能な基礎であると考へられてゐる事に單に形成の素材といふに盡きざるその原理としての積極性は見出されるであらう。夫故例へば最低次の自然的存在として考へられた火・氣・水・土の單純物體の相互的生成變化に關してその相互變化の可能な基礎として第一素材を考へる。斯かる窮極的素材は生成消滅の基礎として相互の變化を可能ならしめる原理であり、そこに存在形相に對して對立的原理としての積極性が考へられるが、併し斯かる窮極的素材は夫自身としては知られず(形而上學 VI 10 一〇三六a 8)、彫像に對する銅臥臺に對する木材といふ如き例から類比的に知識されるものとされてをり、斯かる仕方をして思考される以外にないのであり(自然原論 I 7 一九一a 7—12)、従つて此處に於いても自然的存在に關し技術的存在に關すると特に異つた把握は見出されないのである。

次に存在形相は自然的存在が生成運動に於いて把握される事に由りて、それは同時に目的因として或は運動因として考へられるのであるが、この場合に於いても自然的存在は技術的存在と同様に考へられてゐる。

アリストテレスに於いて形相因が同時に目的因として考へられる事は前述の如く存在形相は存在がその爲に存するその存在の働であり、それが存在目的とされてゐる事からも理解されるであらうが、就中それが目的因として考へられるのはアリストテレスが生成運動の秩序に於いて自然を把握してゐるからである。存在形相は存在の生成に於いて目的としてその運動を規定する(形而上學 IV 4 一〇一五a 11)。この事がそれが同時に目的因とされる所以である。アリストテレスに於いては自然的存在の生成は存在への生成であつて存在は生成の終局に於いて到達されるものではあつても、それは單に生成の結果その因果的必然に由りてもたらされるものと考へられてゐるのではなくして、現實的には終局に到達される存在は存在論理的 *Nous* には却て生成に先立ち生成を定めてゐるものと考へられてをり、従つてそこでは目的性は存在論理上生成に先立つ存在形相が生成をそれへ向つて規定する仕方に他ならない。斯くて自然的存在をその

生成に於いて把握するとき自然は目的性としての原理と考へられるのである（「自然原論」Ⅱ 8—199b32）（同上Ⅱ 2—194a28）。斯かる自然的生成の把握に於いて就中自然は技術的作成に於ける技術と同様に考へられてゐる。技術に依つて行はれる事の前後の秩序は目的性に依り規定されてゐる。そこでは終局を目的として次々の事が行はれてゐる。それはその作成の原因である技術の目的性を示してゐる。自然に依つて行はれる事の前後の秩序も技術に依る事に於けると全く同様であり、それはその由りて来る本性自然の目的性を示す（「自然原論」Ⅱ 8—199a15—20）。斯くて目的性はアリストテレスに於いて自然に依ると技術に依ると同じく生成運動の言葉乃至原因として、その原理であると考へられるのである。「吾々が或る目的の爲にといふ事が第一の原因であると思はれる。蓋これに言葉であり技術的に合成されたものに於いても自然的に合成されたものに於いても同様に言葉が原理である。醫者は健康を建築家は家を思考や感覺に依つて規定した上で彼等の行ふ一々の事の何故に斯く行はるべきかの言葉乃至原因を明にする」（「動物體論」Ⅰ 1—639b1—11）と言はれてゐる。

以上の如くアリストテレスに於て存在形相は生成の終

アリストテレスのフュシスに就いて

局に現實に完成されるものではあつても、それは單にその現實性に盡きず、存在論理的には生成に先立ち目的性として生成を規定する。夫故にそれは現實の存在に盡きざる何等かの超越性を有すると考へられるが、それはその存在の元であり、従つて又生成の元にあるといふ謂はる存在論理的原本性であつて現實的存在を離れて實在する超越的存在であるといふのでない事は言ふまでもない。

アリストテレスにとりて形相は必ず現實の存在に於いて存するのであり、周知の如くアリストテレスがプラトン學派の形相を論駁せるはそれが現實を離れた超越的存在性であると考へられたが爲であつた。アリストテレスに於いても存在形相は單なる現實性に盡きるものではなく、夫故に生成運動の原理として考へられるのではあるが、しかもそれは決して現實の存在を離れてはない。それは現實の存在に於いて現實の存在に働くものである。自然學の關する限りは動くものが動かすのであり、動かすものは夫自身又自然的存在である。存在形相は斯く現實に働く原因として運動因と考へられるのである。「運動因はこれら「形相因や目的因」と形相上同一である。蓋、人間が人間を生むのである。一般に動くものが動かす。然らざれば最早自然學には屬さない」（「自然原論」Ⅱ 7

一九八 a 26—28)。

アリストテレスが屢、斯く「人間が人間を生む」と言ふとき、その生成に存在形相が存在論理上先立つてゐるといふ事を一方に意味してゐると共に、そのみなもず他方に現實に時間上も同一形相の存在が先立つてゐるといふ事、形相は個に於いて個を生産するといふ意味を含んでゐる。「作りしものが存在論理上のみならず時間上も先に既に存したのである。蓋人間が人間を生む。夫故前者が斯かるものであるから後者に斯かる生成が起る」(「動物體論」I 1 六四〇 a 24—26)。「凡そ生成するものは特定のものから特定のものへ始源から始源へ最初に動かし既に特定の本性自然を有するものから特定の形相乃至斯かる他の終局へ生成する。蓋人間が人間を植物が植物を夫々に關し基體にある素材から生産する」(同上、II 1 六四六 a 20—35)と言はれるのはそれである(參照「形而上學」V 5 一〇七一 a 13—24)。形相は原理としては一々の個を超越しながら、しかも必ず個に於いて個に働くのである。形相が現實に働く原因として考へられるのは必ず斯かる仕方に於いてであり、斯かる仕方に於いて形相因は運動因であり得る。

アリストテレスに於いて運動因は個から個へ働くもの

として現實に動かす原理であるが、斯く現實に動かす原理として考へられてゐるものは矢張り形相である。「人間が人間を生み植物が植物を生む」と言はれてゐる如くそれは現實に先立つ同種の他の個に於いて存する同じ形相であつて(「形而上學」VI 7 一〇三二 a 24—25)(同上、I 〇三四 b 17)他に何等かの物力的な原因がそこに考へられてゐるわけではない。運動因と呼ばれるものが物力的なものでなくして形相であるといふ事は近世西歐的把握と異なるアリストテレスに特異な古代希臘的把握と言ふべきであらうか。その事は生物的事象のみならず宇宙的事象に於いても又斯かる自然的事象のみならず人間技術的活動に於いても同様である。アリストテレスが技術が運動因であるといふとき、そこに考へられてゐるものは技術者の筋肉運動力ではなくして技術者の「思考」の中に規定された作品の形相である。家を建てるものは建築技術であり人體に健康をもたすものは醫術であるとされるが、これら技術を成立せしめてゐるものは建築家や醫者の思考の中に於ける家や健康の形相であつて、それ以外の何ものでもない。運動因即ち動かすものと言はれる技術は言葉であり形相である。「人間が人間を生む。個的な人間が特定の人間をである。技術に就いても同様で

ある。醫術は健康の言葉である」(形而上學「Ⅹ」31—70a 27—30)。「動かすものは自然的なものに於いては人間にとり人間である。思考からのものに於いては形相である。……蓋、醫術は或意味で健康の形相」であり建築術は家の形相であり人間が人間を生む」(同上「Ⅰ」70b 30—35)。「或意味で健康は健康から家は家から生成する事になる。素材なきそれから素材を有するそれである。といふのは醫術は健康の、建築術は家の形相であるからである」(同上「Ⅶ」1—10「Ⅲ」11—14)。「健康になる事を作るもの健康になる事の動がそこからである。始源は技術からの場合は心の中なる形相である」(同上「Ⅰ」32b 21—23)。

## 三

アリストテレスに於いて自然は存在の原理として以上考察せる如き四つの原理性として把握されてゐるのであるが、自然的存在は動くものとして特にその生成に於いて考へられる。故に自然は就中目的性なる原理として把握される。「目的性」と美とは技術的作品に於けるより自然の作品の中によりきざりて存する」(動物體論「Ⅰ」639b 19—21)と言はれアリストテレスは自然的存在

アリストテレスのフュシスに就いて

の生成に於ける目的性を技術的作成に於けるにもまさりて著しく見てゐるのである。その把握の順序より言ふならばむしろ自然的存在の生成に於ける目的性を見る事に由りてそこに原理性としての自然の存在を明白なものとして把握した如くである。次の如き言句はこれを示唆するものと思はれる。「何ものも妨げざれば動がそれへ向つて終結する特定結局の明白なる到處に吾々は或るものは或る他のものゝ爲にと言ふ。夫故自然と吾々が呼ぶ何等か斯かるものが存する事は明白である。蓋、各種子から矢鱈なものが生成するのではなく或る特定の種子から或る特定のものがであり、又矢鱈なものから矢鱈な種子が生ずるのではない」(動物體論「Ⅰ」641b 24—30)。

アリストテレスの把握が斯くの如く目的論的であるといふ事は自然的存在原理に就きての上述の吾々の考察の中にも觸れられた事であつたが、吾々は尙次にこの事特に考察してアリストテレス把握の根本の究明を試みようと思ふ。

アリストテレスの目的論的立場も或る機械論に對立して述べられてをりアリストテレスは彼に先んずる自然論を悉く斯かるものとして考へてゐる如くである。「古の最初に自然に關し哲學せる人々は素材的原理や左様な原

因に關し何であり如何なるものであるか、又それから如何にして全體が生成したかを考察した。即ち何が動かしてゐるか。例へば争か愛か理性か偶然か、又基礎的素材は次の如き本性、自然を持つもの、例へば火は熱、土は冷、前者は輕、後者は重を必然持つものとして斯様にして宇宙をも生ぜしめる。動物や植物の生成に關しても同様に論ずるのである。例へば體の中に水が流れ、ば腔即ち食物と排泄物を凡て受容するものが生じ風が貫通すれば泉腔を生ぜしめる。氣や水は體の素材である。蓋、斯かる物體から凡ての者共は自然を成立せしめてゐる」(『動物體論』I 164〇b 4—18)。ところで別な箇所でも論ずる所に由れば「或者は愛や争、他の者は理性といふ如く他の原因を語る人々も單にそれに觸れたのみで止めてしまつてゐる」(『自然原論』II 8—198b 14—16)のであり夫故結局「凡ての人々は必然といふ原因へ導いてゆく。即ち熱や冷や斯かる各々の事が斯々の本性、自然のものであるから斯々の事が必然生成し存在する」(同上 198b 12—14)。而してこれらの人々は自然に依る凡てが目的性に從つてゐるものである事を自らも肯定してゐながら(同上 199a 6) 目的性を原因として認めず凡てを必然に由りて論ずる。「例へば穀物が生長する様

にゼウス神が雨を降らすのでなく必然に由りてある。蓋上昇したものは冷却されねばならず冷却されたものは水と成つて下降せねばならぬ。この事が成れば穀物が生長するといふ結果になる」(同上 198b 18—21)。そしてこの考へは動物植物の諸部分に關しても同様である。「例へば前齒は分切するに有用な様に鋭く臼齒は食物を磨碎するに有用に平たく必然から生へるがその爲に成つたのでなくそう成る結果になつたのみである。目的に從つて存すると思はれる其他の部分に關しても同様であつて目的に從つて生じた如く凡てが結果した所では偶然から有用に組織された事に由りそれが保存され然らざるものは滅してしまつたし又滅してゆくのである」(同上 198b 24—31)。アリストテレスが斯くの如く敘述してゐる思想に言はれる必然が因果的必然であり偶然は目的偶然である事は縷説を要せぬであらう。これらの説は「自然的存在がそれから成る基本的物體要素、火・氣・水・土とそれらの持つ冷・熱・乾・濕・輕・重の如き物的性質を基本として凡ての自然的現象を因果的必然を以て成立するとするものであり、それは機械論と呼ばれてゐる立場に他ならない。吾々は此處にアリストテレス以前の希臘思想に果して斯かる機械論が存在したのであるか、或



はそれは單にアリストテレスに斯かるものとして解され  
たに過ぎないのであるかの問題は暫く措き、兎に角アリ  
ストテレスの目的論的立場が斯かる機械論に對してゐる  
ものであるを知るのである。

アリストテレスは以上の如き機械論に對して自然的存  
在の生成の到處に目的性が明白に見られるといふ事實を  
指摘してゐる（「自然原論」II 8—199a5—8）（同上  
199a20—30）。それはアリストテレスが自然學者は  
自然的存在に關してもその生成に關しても現象事實を見  
た上で何故であるかの原因を論ぜねばならぬと言ふ（「動  
物體論」I 639b8—11）所以と解せられる。これ  
ら機械論は前述の如く自然的存在生成の有目的性を偶然  
に歸するに對してアリストテレスはそれら有目的性は恒  
に乃至少くも大多數の場合に見られる事實であり、斯く  
恒に乃至大多數の場合に行はれる事實はその本性自然  
に依る事であつて偶然からの事ではあり得ないと論ずる。  
例へば冬期に屢、降雨があるといふ事は「希臘の地では」  
偶然ではあり得ず、もし盛夏にその事あればそれが偶然  
である。又夏の暑熱は偶然ではあり得ぬが冬期に暑熱の  
事あれば偶然からである。斯くして恒に乃至大多數の場  
合に行はれる事は偶然からであり得ず自然に依る事であ

アリストテレスのフュジスに就いて

るとするなら自然的生成が有目的に行はれるといふ事實  
はそれが依つて行はれる自然が目的性としての原理であ  
る事を指示するものであると考へるのである（「自然原  
論」II 8—198b35—199a8）。蓋、アリストテレス  
に由れば現象事實はその依つて行はれる自然を指示し  
又自然はその然る如く現象事實に表示される。「行はれ  
る如き本性自然のものであり、又妨げなき限り各、は本  
性自然のあるが如くに行はれる。有目的に行はれるので  
あるなら有目的な本性自然のものである」（同上、199  
a9—12）と言はれてゐる。斯くて自然的生成に於ける  
目的性の事實を偶然に歸する上述の機械論的把握は自然  
の現象事實を説明するに不充分なものと考へられるので  
ある。それは例へば器物の形を説明するに斧や錐の如き  
道具が打當つて或ものは曲面或ものは平面に成つたと  
言ひ何の爲に何故に左様な打方をして斯様な形となしたか  
の説明をなさぬ如くである（「動物體論」I 641a10  
14。或は防壁の成立の必然を隠蔽や保護といふ如き目  
的に置かずに重いものは下へ軽いものは上表へ運動する  
本性自然のものであるから重い礎石は最下にそれより軽  
い土はその上に最も軽い木材が最上に積まれて防壁が必  
然生成したと考へる如くであるとなしてゐる（「自然原

論」II 9一九九b35—1200a7)。

勿論アリストテレスは存在の生成に物的性能に依る因果的必然を無視してゐるのではない。例へば防壁の建設に木材は軽く石材は重いといふ物的性能から来る必然を無視し得ずこれら物的性能を無視して防壁は成立し得ない。アリストテレスに於いてそれは如何なる目的もそれなしにはあり得ぬ必然として素材としての原因と考へられ、如何なる存在も斯かる原因なくしてあり得ぬが、併しそれに由りて存在するのではない。その存在の由りて存する原因は例へば隠蔽し保護するといふその存在目的即ちその存在の持つ言葉である<sup>言葉</sup>と考へられてゐるのである。又例へば鋸の存せん爲には鐵が存せねばならない。併しその必然は素材としての原因であつて鋸の存在目的ではない。鋸の由りて存する存在原因は物を挽き切るといふその働にある。且この存在目的である働がその存在が何から成らねばならぬかといふ事を定めて来る。それは前述の如く素材が形相に關係的であると考へられた所以であつて防壁が石や木材から成る事も鋸が鐵から成る事も夫々の存在の目的に由り定められて来る。それらはそれらなくして夫々の存在のあり得ぬ必然であるが、それらは又夫々の存在目的に由り定められて来る必然とし

てアリストテレスは斯かる必然を「假定的必然」と呼んでゐる。アリストテレスの言ふ必然は素材の側に考へられた斯かる必然である(「自然原論」II 9二〇〇a5—15)。「必然は假定からであり目的としてではない。蓋、必然は素材の中にあり目的性は言葉の中にある」と同  
上、二〇〇a13—15)。

斯くアリストテレスは物的性能に由る規定をそれなくして目的も成り得ぬものではあるが、それが目的ではなく目的の爲の素材として目的に由り定められて来るとの意味で假定的必然と呼ぶのであるが、それなくして目的もあり得ぬといふ事を取り出して特に考へれば逆に斯かる必然は目的を制約すると考へられ得る。素材は目的を制約する。例へば如何なる家が建てられるかは資材に由り制約される。或は心的性状は身體の如何に由りて制約される。アリストテレスも斯かる事柄を考察してゐないのではない。殊にその動物論中には體の成素となる素材が動物の心的性状に或る規定を及ぼしてゐる事が考へられてゐる。例へば血液が水質を多分に有するか土質を多分に有するか、の差異が動物の智能や性格を支配すると論ぜられてをり(「動物體論」II 4)或は心臓の大小硬軟の差

異が動物の性格に影響すると論じ、同上Ⅲ<sub>1</sub>六六四a<sub>6</sub>—23)、或は食物攝取に由り下方から来る熱が上方に存する思考や感覺の働を妨げるといふ如き事を論じてゐる(同上Ⅲ<sub>1</sub>六七二b<sub>30</sub>)。斯く素材はアリストテレスに於いて既述の如く存在と非存在の可能なる原理とされ一方に存在生成の爲の素材として存せねばならぬ必然であると同時に他方に又その存在を騒亂破壊する必然でもある。アリストテレスは素材の斯かる兩方面に觸れてはゐても、その思想に主導的なるはむしろ前者の側である。例へば、自然は凡てを一つに集め部分器官の差異を働の差異の爲に作つた(同上Ⅲ<sub>1</sub>六六二a<sub>22</sub>—24)と言ひ、或は動物體各器官に關してはその働エネトロンから認識が得られるとなし(同上Ⅲ<sub>1</sub>六五五b<sub>20</sub>)、例へば動物の齒の本性的には或る動物には食物咀嚼の働の爲であり、或る動物にはそれのみならず武力の爲で、斯かる動物の齒は銳利で突出してをり、従つて必然、土質な又硬質な本性自然を持つが、それは武器ホプリウとしての性能の爲であると述べてゐる(同上六五五b<sub>8</sub>—13)。如く動物諸器官や肢體の形態・構造・成素をそれらの働から論じてゐる事はその動物論の到處に顯著に見られるその把握の著しい特色をなしてゐる。それはアリストテレスの目的論的立場をよく示して

アリストテレスのフュシスに就いて

ある事柄であつて夫故自然學は目的因と素材因との兩者を考察せねばならぬとなしてはゐても目的因が原理性として優位に考へられ素材因は目的に由り定められる必然としての意味を主として有してゐるのである。——一般に目的の爲の素材が存する事が必然である。家ならば煉瓦や石が存せねばならない。併しこれらに由りて目的が存するのではない。唯素材であるに過ぎない。又それらに由りて存する事になるでもない。併し一般にそれらが存しなかつたならば家も存せぬであらう。家は石がなければ、鋸は鐵がなければ(「自然原論—Ⅱ<sub>1</sub>二〇〇a<sub>25</sub>—29)自然學者は兩原因を論すべきであるが、むしろ目的因である。蓋、これが素材の原因であるが素材が目的の原因ではない(同上二〇〇a<sub>32</sub>—34)と言はれる。

アリストテレスは斯様な目的論的立場に於いて存在の生成に目的性と因果的必然とを決して互に矛盾する兩立せぬものと考へてゐるのではない。存在の生成は一步一步の次々の運動過程から成る事(それを運動の持つ外延性と吾々は呼び得るであらう)を屢、述べてゐるが存在の生成が倏忽として行はれるものでなく時間的に一定の順序を踏むと考へられた。その事は一方から言へばそこに因果的必然が規定してゐるを認めてゐる事に他ならぬ

であらう。アリストテレスは一方にその事を認めながら他方に存在の生成は單に因果的必然に由りて規定されてゐるものではなく、むしろ因果的必然を道具とし手段として規定し、生成の一步一步を存在への目的に向つて統一してゐる原理の存する事を力説してゐるに他ならない。アリストテレスが「生成は存在の爲であつて存在が生成の爲ではない」(「動物體論」I 1640a 18)と言ふのはこの事である。存在は生成の單なる因果的必然の結果であるのではなく存在形相は生成の最初よりそれへ向つて生成の次々の一々の過程を規定しその全體を統一してゐる。存在は最初より最終に至るまで生成を謂はゞ内に包んでゐるのである。その事に由りて生成運動は連続であり得る。アリストテレスは斯かる所に自然的生成運動の連続性を認めてゐる如くである。「自然は終局であり目的である。蓋そのものゝ運動が連続であるものには或る終局が存しそれは最終端であり目的性である」(「自然原論」II 2 194a 28—30)「自らの中にある或る原理から連続的に動いて或る終局へ到達する限りのものは自然に依るものである」(同上 II 8 199b 15—18)と言はれる。而してこの連続的運動を動かす原理として考へられてゐるものは、既述の如く、結局は目的因とされ

運動因とされる存在形相に他ならない。そこに於いては存在形相は現實には生成の終局に到達されるものでありながら本性自然上は生成に先立つと考へられる。「生成の上でと存在の上でとは反對である。生成上後なるものが本性自然上先である。生成上最後のものが最初である。蓋、家は煉瓦や石の爲ではなくこれらが家の爲である」(「動物體論」II 1646a 25—28)「素材や生成は時間上は先であるが存在論理上は存在乃至各々の形相が先であるが必然である」(同上 1646b 1—3)。

存在の生成が倏忽として行はれるのではなく一定の素材から一定の次々の行程をとつて完成するといふ事は前述の如く一方から言へばそこに因果的必然が規定しその規定に従つて行はれてゐる事である。併しアリストテレスが存在を單に斯かる因果的必然に規定された生成の結果として考へるのでなく、存在が却つて生成に先立ち目的として生成を規定しその目的に向つて連続的に統一してゐると考へる事は即ち存在の生成を單に原因結果の外延的連鎖として把握するのでなく、その外延的連鎖に目的である存在形相に由る内包的統一を把握してゐる事に他ならぬであらう。原因結果の外延的連鎖は斯かる内包的統一に規定されてゐると考へられる事に由りて單に因果

的必然として把握されるのでなくして目的に規定された必然、假定的必然として把握されてゐるのであると解される。斯かる把握に於いて因果的必然は目的に對する素材や手段乃至道具として目的性に統一規定され目的必然としての意味に轉じて来る。そして斯かる把握に於いて前述の如く自然的生成は技術的作成と同様に考へられてゐるのである。「終局のもの、目的性即ち原理は限定と言葉からである。それは技術的なものに於けると同様で、家が斯かる性質のものであるから必然斯かるものが生成し豫め存在せねばならず、健康は斯かるものであるから斯く／＼のものが必然成り豫め存在せねばならない。同様にして人間も斯かるものであるから斯く／＼のものが必然存在せねばならず、その爲には更に斯く／＼のものが存せねばならない」〔自然原論 II 9 二〇〇 a 34—b 4〕「永遠なものには絶對的必然が存するが生成する凡てには假定的必然が存する。それは恰も技術的なもの例へば家や其他斯かるものの何にでもに於ける如くである。家とか或は他の何等かの終局の存せんには斯く／＼の素材が豫め存し、又第一に斯かるものが生成し動かされ、次に斯く／＼の事がといふ如くして順次その爲に各、は存する終局に達するまで生成し動かされる事が必然であ

アリストテレスのフュシスに就いて

る。自然に依りて生成するものに於いても同様である」〔動物體論 I 一六三九 b 24—一六四〇 a 1〕「夫故、就中次の如く論すべきである。これが人間の存在本質であるから夫故にそれらのものを持たねばならない。これらの部分を持たずには存し得ぬからである。然らずとするも、それに最も近く、異なる仕力では全く不可能であるか或は斯くある事が麗しいので斯かるものが伴ふのである。斯かるものであるから斯かる性質の特定の生成が起る事が必然である。夫故に諸部分の中で先づ第一にこのものが次にこのものが生成する。自然に依り組成されてゐる凡てに互りて同様である」〔同上六四〇 a 33—b 4〕これらの言句は生成の終局に到達される存在が生成に先んじ生成を規定する仕方を示してゐる。「自然的なものに於いて必然は素材として言はれるものとそれの諸運動とである事は明である」〔自然原論 II 9 二〇〇 a 30—32〕と言はれる如く、そこに素材や生成運動の必然は存在を目的として統一的に規定される事、即ち假定的必然として把握されてゐるのであり、その事は自然的生成に於いても技術的生成に於いても同様に考へられてゐる。生成の終局に到達される存在が生成に先んじ目的として生成の必然を規定し統一してゐるといふその生成運動の論理に於

いて兩者は同様に把握されてゐるのである。生物の種子から成熟への生成過程と家の建築完成への作成過程とが右の如き同一の運動の論理を以て考へられてゐるといふ事はアリストテレス把握に見出されるその著しき特色であると考へられる。

アリストテレスが生成する存在の生成に關し考へる必然は以上述べた如き假定的必然である。以上に考察されたのは主として生物的事象に關して、あつたが單なる物理的事象に關してもアリストテレスはそこに於ける秩序を單なる因果的必然を以て把握してゐるのではない。此處に於いてもアリストテレスは物的性能に由る必然的規定を生成運動に認めてはゐても冷・熱・乾・濕・輕・重の如きそれら物的性能を事象秩序にとり單に素材的乃至道具的原因として考へてゐるのみであつてそれを秩序の勝義の原因として考へてはゐない。例へばアリストテレスが「土が濕れば必然蒸發が起り蒸發が起れば必然雲が生じ雲が生ずれば必然雨が降り雨が降れば必然土が濕る」(「後分析論」一九六<sup>a</sup>2—5)と言ふ時、此處に言はれてゐる必然は因果的必然であると考へられるが、併しアリストテレスが此處に見てゐる生成運動の秩序は生成の圓環還歸であつて、事象のこの圓環的秩序が單に冷・熱・

乾・濕・輕・重の物的性能に由り必然的に規定されて生じたものであるとはなしてゐない。嘗て吾々が考察する如く(「アリストテレス物理」(三)哲學雜誌六六三號)アリストテレスは斯かる物的規定は單に素材的乃至道具的原因として考へてゐるのみであつて、その秩序的生成に永遠な宇宙圓運動を運動因として考へてゐる。アリストテレスに由れば宇宙の圓運動は運動ではあつても地上の生成運動と異り永遠に恒常に同一である。アリストテレスは此處に假定的必然と異なる絶對的必然(「アリストテレス」)を言ふのである。その必然性は恒に然るといふ恒常性に他ならぬものとされてゐる(「生滅論」II II 三三七b 34—三三八a 3)。

(「動物體論」I 1 六三九b 24)。アリストテレスに由れば圓運動は特定終局に向ふ運動と異り到處同一所より出て同一所に歸り始も終も有せぬ。その運動は完全であつて限を持つ其他の不完全な諸運動を包むものと言はれ(「宇宙論」II 1 二八三b 26—二八四a 16)。(「自然原論」III 3 二六四b 9—25)従つてその運動は形相的に考へられる。地上の物理的事象の秩序を規定してゐるものは斯かる形相的運動であり、それが時間上も存在論理上も生成に先立つものとして考へられてゐる。従つて此處に於いても生成に於ける因果の外延的連鎖は宇宙の形相的運動

に由り内包され統一されてその生成運動の秩序を保つのである。生成する存在は存する事も存せぬ事も能ふものであり斯かる存在に於ける生成に前なる事象あれば必ず後なる事象ありとの必然性の保證は存し得ない。従つて其處に存する必然性は事象夫自身の中には存せず宇宙運動に由り規定される圓環性に支持される事に由り始めて存する。それは矢張圓環性を前提とする假定的必然に他ならないのである。地上の事象は宇宙の形相的圓運動を模倣すると言はれてゐる（「生滅論」II 10 三三七、三三八）がその事は地上の生成運動にとりて宇宙の形相的運動が目的性としてそれを規定してゐるを指示するものと解して誤らぬであらう。斯かる意味に於いて單なる物理的事象にも有目的な秩序が把握されてゐると考へられる。形相が生成に先立ちそれを内包統一してゐるといふ生成運動の論理は此處に於いても認められるのである。

以上の考察に由りて吾々はアリストテレスの言ふ必然が如何なる意味のものであるかを一應明になし得たであらう。存在の生成に於ける時間的前後の過程を單なる因果的必然として把握するのは機械論的立場であるがアリストテレスはこれに對しそれを單に因果的必然として把握するのではなく、そこに目的性の統一を見る事に由りて

アリストテレスのフェニシスに就いて

斯く目的性に規定された必然として假定的必然を言ふのである。それは目的の爲に存する謂はゞ目的への必要である。且それなくして目的も成り得ぬといふ意味に於いて目的性とは獨立した原理である。しかも目的に即した必然として目的性は原理として優位に考へられる。蓋、目的性が生成の全體を内包し統一してゐるからである。自然的存在の生成の秩序はアリストテレスに於いて目的性と如上の意味の必然性とを原理として把握される。アリストテレスの自然は目的性と必然性との原理を以て考へられるといふ事も許されるであらう。且この點に於いて自然的生成と技術的生成とは全く同一に把握されてゐる。生成に於ける時間的前後の因果的連鎖が目的性に内包される事に由り目的必然的に結合されてゐるといふ點に於いて兩者は同様なのである。そしてこの點に於いて兩者は共に偶然から區別される。

#### 四

既述の如くアリストテレスは自然を恒に乃至少くとも大多數の場合に同一な秩序の行はれてゐる所に把握するのであるが偶然是斯かる秩序の他なる事として考へられる。例へば恒に乃至大多數の場合に人間からは人間が生まれ小麥からは小麥が生じて橄欖が生ずる事はないと

いふ事の原因はそれら各々の本性自然に置かれ斯く「自然に由りて生成する凡ては恒に乃至大多數の場合に特定の仕方で生成する。恒に乃至大多數の場合の他なる事は偶然からである」(「生滅論」II 6 三三三 b 4—16)と言はれ或は宇宙が偶然から成るとなす説を否定せる場合にもそこには生物的事象に於けるにもまさりて恒に一定した秩序が行はれてを偶然や無秩序に由る事は何等現れてゐないといふ理由によつてゐる(「動物體論」I 1 六四—16—28)。「自然原論」II 4 一九六 a 24—b 5)。或は「自然に由るもの」中には「矢」<sup>トキムスガクシ</sup>「鱈」<sup>サケ</sup>にといふ事は存しない。到處に又凡てに存する事も偶然からではない。「宇宙論」II 8 二八九 b 25—27)。「偶然とは恒に乃至大多數の場合にといふ事の他に存在し乃至生成する事である」(同上 I 12 二八三 a 31—b 1)とも言はれてをり、斯くてその「自然原論」中に偶然を規定せんとするに當りても、この事を先づ第一に述べてゐる。即ち恒に乃至大多數の場合に特定の同じ仕方で生成する事は決して偶然からの事ではない。併し斯かる事の他に尙起る事があり凡ての人々はこれらの事を偶然に由ると言ふので偶然は明に存すると言ひ偶然に由る事は左様な事であり又左様な事が偶

然に由る事であるとなしてゐる(「自然原論」II 5 一九六 b 10—17)。

偶然の領域は斯く恒に同一に行はれる事象秩序の他に存すると考へられるが、更に斯かる事の中で特に目的の存するものに偶然是起るとなす。即ち「生成する事の或るものは目的を以て生成し或ものは然らぬ(目的の存するもの或るものは意志によるものであり或ものは然らぬが何れも目的の存する事に屬する)夫故必然な事乃至大多數の場合といふ事の他なる事の或ものにもそれに關し目的の存する事が許される。思考から行はれる事や自然からの事が目的を持つ事であるが斯かる事が「附帶的に起つた場合偶然からであると吾々は言ふ」(「自然原論」II 5 一九六 b 17—24)と言ひ、即ち目的にかなつた事が思考や自然の如き本来の原因に由るのでなく「附帶的原因」<sup>トカクシエンペイコス</sup>に由り行はれた場合それが偶然に由る事であるとなすのである。

而してアリストテレスは偶然が意志を有する者即ち行爲の存する者に起る場合を「テネケー」と言ひ然らざるもの無生物や動物や小供に起る場合これを「アウトマトン」と言ひ偶然を二種に區別する(「自然原論」II 6 一九七 b 1—15)。例へば集金の目的を有する者が或場所へ赴い



た爲にその目的を達する事が出来たがその目的の爲にそこへ赴いたのでない場合、そこへ来たといふ事はテュケ  
ーからであると言はれる。この場合もしそこへ赴いて集金  
出来るとの思考から集金の意志を以てそこへ赴いたので  
あれば偶然ではない。斯かる本来の原因に由りそこへ來  
たのでなく集金といふ目的にそこへ來る事が別な原因か  
ら附帶したのみである。夫故テュケーは「目的とする事

への意志に即する事の中に附帶した原因」(同上 一九六  
b 33—一九七 a 8)と定義されてゐる。これに對し多くの  
動物や無生物、凡そ意志行爲の存せぬ者に起る偶然例  
へば馬が或所へ來て救はれたが救はれる爲に來たのでは  
ない場合或は三脚椅子が落ちて腰掛けられる様に立つた  
がその爲に落ちたのではない場合、アウトマトンからと  
言はれるとなす。これらの場合に生命の保持といふ馬が  
自然に有する目的、椅子の腰掛ける爲といふ用具として  
の目的が夫々馬がその場所へ來る事に由り又椅子が落ち  
る事に由り達せられたのであるが、これらの事はそれら  
の目的に附帶したので本来の原因から起つたのではない。  
夫故「一般に或事を目的として生成するものの中で結果  
した事を目的として起つたのでなくその原因が外にある  
場合アウトマトンからと吾々は言ふ」と定義してをり、テ

ュケーはこの特別の場合として「アウトマトンから起る  
事が意志される事に屬し意志を有する者に起つた場合テ  
ュケーからである」(同上 一九七 b 13—22)と言ふ。即ち  
アウトマトンはテュケーより外延廣くテュケーはその中  
の或る一部分の特別の場合に屬するものと考へられてゐ  
るのである(同上 一九九 a 36—b 1)。

扱、以上によりアリストテレスの偶然の定義の意味す  
る所は略々明であらう。アリストテレスは偶然を附帶的  
にもせよ原因と呼んでゐるがそこに何等か積極的な原因  
性を考へてゐるわけではない。例へば何等か神祕的な原  
因をそこに考へるのではない。「偶然是原因であるが何  
等か神祕的な餘りに魔的な事(マジック)で人間の思考には不明であ  
る」(「自然原論」II 4—一九六 b 5—7)となす考への存  
する事をアリストテレスは擧げてゐるが、これに對して  
は、斯く偶然が人間に不明と思はれるのは、それが不定  
であるからであり、不定であるのはそれが本来の原因で  
なく、附帶的原因であるからである。附帶的原因は數的  
に無限定に存し得る。例へば集金の目的でなく或所へ赴  
いて集金の出来た場合、そこへ赴いた原因は或人に會は  
うと欲して行つた或人を追つて行つた、逃げて行つた、  
見物に行つた等の如く無限定に存する。その事が偶然が

不定であり不明に思はれる所以であるとする(同上5—九七a 9—18)。又一般に偶然は非合理な事とされてゐる所以は合理は恒に乃至大多數の場合に行はれる事に屬するが偶然はこれらの他なる事であるからであると解明し(同上197a 16—20)。又斯く恒に乃至大多數の場合に行はれるのではない事に屬する偶然は不確實な事であると考へる。斯く不定、非合理、不確實の如き徴表を以て考へられる偶然はアリストテレスにとりて積極的原因性ではなく結局原理性の缺如に他ならないのである。「生成するものは技術に依つて生成するか自然に依つてか偶然である。技術は他のものの中にある原理であり自然は自らの中にある原理であり其他の原因はこれらの缺如である」(「形而上學」M 3—1070a 6—9)(同上VI 7—1032a 12—14)と言はれ偶然は自然や原理性の缺如として把握されてゐるのである。

アリストテレスは「自然原論」中に以上の如く偶然を論じてゐる中に何ものも偶然には起らぬとなし偶然の存在を疑ふ説の存する事を述べてゐる。即ちそれに由れば「何ものも偶然には起らない。偶然から起ると言はれる事の凡てに一定した何等かの原因が存する。例へば偶然に市場へ行つて思はずも會はうと欲してゐた人に會つた

といふ事には市場へ行かうと欲した事が原因である。同様にして偶然からと言はれる其他の事にも恒に何等かの原因を把握する事が出来る」(「自然原論」II 4—96a 1—7)となすのである。アリストテレスが斯かる考へを或點で尤もであるとなしてゐる(同上197a 7)のは何事の起るにも必ず因果的必然が存するからでありアリストテレスが附帶的にもせよ偶然を原因と呼ぶ所以もそこに存すると解せられる。偶然と言はれる事にも必ず因果的必然が存し且偶然からと言はれる事を起し得る因果的必然は前述の如く數的に無限定に存する。この事は偶然に依る事が自然に依る事や技術に依る事と如何に區別されるかの根本に聯つてゐる。

自然に依る事も技術に依る事も偶然に依る事も何れも因果的必然を以て行はれる。それらは何れも原因結果の外延的連鎖を以て終局に到達するのである。この事に於いてそれらは凡て同様である。因果的必然は目的性と矛盾なく兩立すると同様に偶然性とも矛盾なく兩立する。偶然に依る事が自然に依る事や技術に依る事と區別される所以はそれが單に原因結果の外延的連鎖に過ぎずそこに外延的連鎖を内包する原理性の缺如してゐる事にある。既に屢述べた如く自然に依る事も技術に依る事もその

終局に到達する原因結果の外延的連鎖がその終局とする目的性に依り内包され因果的必然性は目的性に規定される事に由り假定的必然として目的的必然にまで統一されてゐる。偶然に依る事をこれから區別するのは斯かる内包的統一がそこに缺如してゐる事にある。偶然に依つて目的は到達されてゐてもそこに至るまでの因果的必然はその目的に由り内包統一されてゐない。それが偶然が附帯的原因と言はれる所以でなければならぬ。そこには全體を統一してゐる内包的規定に由る必然性が見出されない。そこに於ける事象の外延的連鎖はその事象の進行に、自然や技術に依る場合に於ける如き運動の論理を有しないのである。

アリストテレスが單なる因果的必然が存在の成立を説明し得ぬと考へる事もそれが事象の時間的前後に由る單なる外延的連鎖に過ぎず、それを内包してゐるものが缺如してゐると考へられる限りに於てである。斯かる缺如に機械論的自然把握の不充分とされる所以も存するのである。機械論的把握は自然に於ける目的性を因果的必然に附帯する偶然に歸する（「自然原論」Ⅱ 8—19 a b 16—36）が、それはアリストテレスに由れば前述の如く原理性の缺如を意味するに他ならず何等の説明ともなり得ないのである。アリストテレスは時間的に外延を有する

アリストテレスのフニシスに就いて

ものゝ内包的統一に於いて技術的なものに於けると同じく自然的なものに於ける秩序を見てゐるのであり、そこに原理的なものを見出してゐるのである。吾々はこれがアリストテレスの目的論的立場の有する論理であると解するのである。

## 五

扱、以上吾々の考察の主眼はアリストテレスの自然が四つの存在の原理に於いて以上の如き運動の論理を持つものとして把握されてゐるといふ事であつた。斯くの如き自然の概念をアリストテレスは如何にして得たのであるか。アリストテレスがそれを彼に先立つ思想家達から繼承したものである事は言ふまでもない。併し歴史的に斯く繼承した自然の概念を以上の如き意味内容に於いて把握した事はアリストテレス自身の固な哲學思想に由るものである事も亦言ふまでもない事であらう。既に言及せる如くアリストテレスは自然學者は第一に現象事實φαινομένων πραγμάτωνを見た上で次にその諸原因αιτιώνを論ぜねばならないと言ふ（「動物體論」Ⅰ 1639 b 8—11）（同上 640 a 14—16）のであり、アリストテレスの自然論が少くとも一方に現象の觀察に基づく實證性を有するものである事はその「氣象論」や動物諸論の實例が豊富に示してゐる所で

ある。それが斯く少くとも一方に觀察に基づくものである事が肯定される以上そこに又觀察からの歸納といふ事の存し得べき事も否定するを得ぬであらう。併し以上に考察せる如き意味の自然といふ概念が歸納に由り單に經驗的に得られたものであるとは直ちに言ひ得られない。

アリストテレスは前述の如く偶然に依る事を區別して自然に依る事は恒に乃至大多數の場合に然か起る事であるが偶然に依る事は然らぬとなしてゐた。それは自然に依る事の恒常な同一性を言表はしてはゐても、その故に自然は大多數の場合から歸納に由り得られた經驗的概念であるとは直ちに言ひ得られない。多種の現象を觀察するといふ事は言ふまでもなく經驗的な乃至は實證的な事柄ではあるが、そこに恆に乃至大多數の場合に行はれてゐる秩序を自然として以上の如き意味内容に於いて把握した事は最早單に經驗的な事柄ではない。アリストテレスは前出の言句「動物體論」ⅠⅠ六四一b24—28に知られる如く自然的生成運動の有目的な秩序を見る事に於いて原理性としての自然なるものゝ存在はそこに明白なものとして把握してゐるのであり、そこにその方法の實證的なるを否定し得ぬが他方に又斯かる原理性としての自然の存する事は證明を要せず自明な事であると言つ

てゐる（「自然原論」ⅠⅠ一九三a3—9）。自然の存在が自明であるとなす事はそれが歸納的推論に由りて得られた經驗的概念でない事を明に示してゐる。それがアリストテレスに於いて自明な事として把握されるのは吾々から言ふなればそれがアリストテレス的把握の根本に屬するからであると解する以外にない。現象に於ける秩序を見る事に由りて、それを以上吾々が考察せる如き原理を以て自然として把握した事は經驗歸納的推論に由つたのではなくして、それがアリストテレス把握の根本に屬する事柄である事に由ると解されるのである。

アリストテレス的把握は客觀を認識する主觀であるものでもなくアリストテレスの自然は客觀であるものでもない。アリストテレスは技術的作品の中に技術を見る如く自然的現象の中にその原因乃至原理としての自然を見てゐるのである。自然學にとりて現象は制作的知識にとりての作品の如く言はれてゐる（「宇宙論」Ⅲ7三〇六a13）所以も或は既出の如く目的性乃至美なるものは技術的作品に於けるより自然の作品に於いてよりまさりて存するといふ如き事が言はれる（「動物體論」ⅠⅠ六三九b20）所以も斯かるアリストテレス的把握を示すものと考へられる。アリストテレスは繪畫や彫刻の如き形象

を見て人が喜悅するのはそこにそれを制作せる技術テヒミイウツルゲイサキを同時に見るからである。況んや人が自然の作品を見て同時にそこに原因である自然を見る事が出来るなら喜悅を感じぬ筈はないとの意味の事を述べてゐる（同上56四五a 16—26）。作品の中に同時に技術を見るときは制作されたものの中に同時に制作せる働を見る事であり形成されたものの中に形成するものを見る事であると考えられる。自然的存在が作品の如く自然がその原因として技術の如く把握されてゐる事は形成されたものの中に同時に形成するものとして自然が把握されてゐる事であると考へられる。そこに自然は形成の原理であり形成の働である。四つの原理を含むアリストテレスの自然は形成的なものであると考へられる。吾々が以上に考察せるアリストテレスの運動の論理はむしろ形成の論理として考へられるのである。

アリストテレスの自然が何等かに技術的であるといふ事は就中その動物論には著しく觀取される事柄であるが、他方に又逆にアリストテレスに於いて技術は自然的であるとも言ひ得られる。そこに於ては技術は人爲として自然に對立してはゐない。その事は技術は自然を模倣し或は時に自然を完成すると言はれてゐる事（「自然原論」II

アリストテレスのフュシスに就いて

8 一九九a 15—17）（同上2一九九a 21）にも知られるであらう。アリストテレスに於いては以上考察せる如く自然も技術も共に同じ四つの原理に於いて、且同じ運動の論理を以て把握されてゐる。唯、技術が作品の外にある原因であるに對し自然は自然的作品の中にあるその原因である事に差異を見出すのみである。夫故、假に家が自然に依りて成るものに屬するものであつたとしても技術に依りて成ると同じ様に成るであらうし、又自然に依るものが自然に依つてのみならず技術に依つても成るものであるとしたなら自然に依ると同じ様に成るであらうといふ如き事すらも言はれてゐるのである（「自然原論」II 8 一九九a 8—20）。アリストテレスに於いて斯く自然と技術が同様に把握され自然は技術的であり技術は自然的であると言はれ得る事はアリストテレスが自然を考察するに技術から類比的に考へたからでもなく、又逆に技術を自然から類比的に考察したからでもなく、それは自然を形成的なものとして把握したその把握の根本に由るのであると考へられる。即ち人間の技術やその作品から自然を類比的に考察するといふ如き間接的思考の手續に由つてゐるのではなく自然を形成的に把握する事が直接その把握の根本に關はつてゐるのであり、夫故に技術と同様

に把握されたのであると解される。自然を形成的なものとして把握せる斯かる把握は如何なるものであると言はるべきであらうか。それは勿論客觀に對する主觀といふ如きものではあり得ない。併しそれが如何なるものであるかといふ事の考察を吾々は暫く此處には措くのである。

アリストテレスの自然は單に對象規定的思考に由りて把握された客觀といふ如きものではなく形成的なものとして何等かに主體的に把握されてゐる事にアリストテレスの自然學が單なる歸納的な經驗科學と區別さるべき所以が理解されると考へられるが、自然が斯く主體的に把握されてゐるといふ事はそれが何等かの形而上學的實體であるといふ事ではない。自然が技術と同様に把握されてゐるといふ事も自然が何等かの擬人的存在として考へられてゐるといふ事ではない。アリストテレスの自然は形成的主體的に把握されそれは經驗歸納的に得られたものではないが、しかも尙それは現象事實に於いて明白なものとして實證的に把握された現象の秩序であり原理性である。それは原理性乃至法則性のそこに固有な把握であると考へられるのである。

## 六

自然的存在が自らの原理として自然を有し以上考察せ

る如き存在の原理と運動の論理に従ふものと考へられ有目的に把握されてゐるといふ事はそこに思考や意志の如き意識的なものが存すると考へられてゐる事ではない。

自然は有目的な原理であると言つても、そこに思考が存すると考へられてはゐない。むしろ思考なくしては目的性は起り得ぬとなす考へを不合理なものとして考へてゐる事は例へばアリストテレスが自然は技術と同様に有目的な原因である事が明白であると論ぜる際に「思量して動かすものを見ぬからとて有目的に起らぬと考へる事は不合理である」(「自然原論」II 8—199b 26—33)と述べてゐる事にも知られる。自然の有目的性は動植物の活動に最も明白であるとされるがアリストテレスはそれらに思考が存するとは考へてゐない。燕が巢を作り蜘蛛や蟻も巢を營み植物の樹葉は果實を守り根は營養攝取の爲に下方に伸びる。その有目的性は人をしてそれらが理性乃至何等か斯かるものに依り行はれてゐるのでないかを疑はしめる程であるが、それらは技術に依りて行ふのでも探究して行ふのでも思量して行ふのでもない」と述べてゐる(「自然原論」II 8—199a 20—30)。

自然が有目的な原理であるといふ事は又それが意志的なものであるといふ事とも異なる。アリストテレスに於い

て意志的なものは有目的なものゝ一部ではあるが全部とはされてゐない（「自然原論」II 5 一九六 b 16—19）。アリストテレスに於いて自然的事は行爲される事即ち意志される事と區別される。後者の原理は行爲者の中にある意志である。これに關し考察するのは實踐學であり、それは動靜の原理を中につ自然的存在に關し考察する自然學が屬する。理論學と區別されてゐる（「形而上學」VI 1—10 二五 b 18—26）。アリストテレスが前述の如く偶然を行爲の存し得るものに起る偶然テニケと行爲し得ぬもの無生物や動物、小供に起る偶然アウトマトンに區別せる事もアリストテレスが自然的存在と行爲的存在とを區別してゐる事を間接に示すものと考へられる。唯後者は前者より外延廣く前者は後者に含まれると言はれてゐる事から、それに相應して自然的存在は外延廣く行爲的存在はそれに含まれるその特殊な二部として考へる事が許されるであらう。例へば人間は動物として自然的存在に屬するが尙意志を有して行爲し能ふ行爲的存在である。斯く考へられるにしてもそれは自然的存在の僅少な一部に存する事に過ぎない。意志的であるといふ事は廣く自然の有目的性の僅少な一部に存する事に過ぎぬ事なのである。且意志的乃至行爲的である限りは最早

アリストテレスのフュシスに就いて

單に自然的とは考へられず自然學の對象ではあり得ない。アリストテレスに於いて生物體の存在形相は魂であるとされる。それは既述の如く存在の形相は單なる物の外形や色彩ではなく物をそれたらしめるそのものゝ働であると考へられてゐる事に由る。恰も道具の存在をそれたらしめてゐるものはその道具の目的であるその用である如く體は魂の爲にあり魂に依りて生物體である。魂が去れば最早そののではない。體は魂の道具の如くであり魂は生物體の形相因であり運動因であり目的因であるとされ魂は體の完成態であると言はれるのも期かる理由からであり、又斯かる點から魂に關し論じ知識する事が自然學者の仕事に屬すると考へられてゐる（「動物體論」II 六四〇 b 30—六四一 a 33）（同上 I 5 六四五 b 14—20）（「心理論」II 四二二 a 20—四二三 a 8）（同上 II 四四一五 b 9—26）。併し斯く考へられるのは魂の倒や状態が體なしでなく素材なくしてあり得ぬ限りに於いてある。多くの生物體の活動や状態は動植物に共通な營養攝取の働にしても或は動物や人間の感覺感情にしても移動の活動にしても各生物體の體的運動や器官を離れて存し得ない。それは素材に内含される言葉（「心理論」I 1四〇三 a 25）であると言はれる。斯かるものである限

りそれを考察する事は自然學者に屬する(「心理論」I 1四〇三a 6、29)。(「形而上學」V 1一〇二六a 5)。併し認識し思考する魂の働即ち理性は體的運動や器官から離れ混ぜず本質的に現勢であり能動的に働くものであり働き掛けられるものでない(「心理論」III 5四三〇a 10—25)。(同上III 4四二九a 10—b 10)。(同上II 2四一三b 25)。(同上I 4四〇八b 20—30)。(「動物生成論」II 3七三六b 29)とされ、それは單なる自然學の考察の外に置かれる。夫故自然學の考察し得るのは魂の全部ではない。もし全部が自然學の考察に屬するとしたならば、自然學以外に哲學は残らぬ事になると言はれる(「動物體論」I 1六四一a 33—b 10)。斯くアリストテレスに於いて思考は自然的存在の一部に存しながら單なる自然を超越するものとして、それは自然學的考察の外にあるものと考へられてゐるのである。

その事は宇宙全體に就きても同様に考へられる。全宇宙は自然的存在の總體である。自然的存在は動くものであり素材と共にあるものである。動くものは大きさを有するものでなければならぬとされ、それは物體であるが乃至は物體や大きと共に起るものであると言はれてゐる(「宇宙論」III 1二九八a 27—b 5)。斯かるものゝ總體

である宇宙の中には或ものが生成し或ものが消滅し運動變化し凡そ動く事が連続して恆に絶える事は無いが動くものは動かされるものであり諸多の運動の窮極の原因として自らは動かすして他を動かすものが、それら諸多とは別に存し、それら諸多の動を包んでゐねばならぬ事が論ぜられてゐる(「自然原論」VII 4—6)。それは無限の時間に互に永遠に運動を起す原因であるが斯かるものは不可分であり部分を有せず大きさを有せぬものであらねばならぬ事がその「自然原論」の最終に論證されてゐる(VIII 10)。斯く外延を有せぬものは最早、自然的存在であり得ず自然學の問題の外にある。それは思考的存在即ち理性として考へられ凡ての運動と時間を包み、それ自身は時間の中にも場所の中にも存せぬものと言はれ宇宙乃至自然的存在はそれに依憑せるものと考へられてゐる(「宇宙論」I 9二七九a 11—b 3)。(「形而上學」VII 7)。斯く自然的存在はそれ自身完結せる全體をなしながらししかもその窮極に於いて單に自然的なるものを超越せるものに恆に包まれ、それに聯關依據してをり、且それと區別されてゐる。斯く自然的存在を超越せる不動な存在を窮極に考へる事に由りそれに關する第一哲學が自然學から區別されるのであり、併し又それが自然的



存在の窮極として自然的存在はそれに包まれそれに依據  
 聯關して考へられる事に由り自然學は第一哲學に密接に  
 聯關して考へられるのである。

(附記) 原典名は便宜上、下の如き略稱を用ひた。形而  
 上學 (Metaphysica) / 自然原論 (Physica) / 宇宙論  
 (De Caelo) / 生成論 (De Generatione et Corruptione) / 氣象論 (Meteorologica) / 動物體論 (De Partibus Animalium) / 動物生成論 (De Generatione Animalium) / 心理論 (De Anima) / 後分析論 (Analytica Posteriora)

尙譯語に關して *physis* は「自然」乃至「本性」或は  
 「本性自然」と譯し *kosmos* は大方は「言葉」と譯し時  
 に假に「存在論理」となし *kinēsis* は「動」乃至「運  
 動」と譯した。これは本文にも言及せる如く場所的運  
 動 *dogma* より遙か廣義である。これらの譯語に關して  
 論ずる事は此處には暫く措く。

アリストテレスのフュシスに就いて

受贈・交換雜誌

禪學研究 (第二號)  
 國語・國文 (十五ノ十二、十六ノ一、二、三)  
 一橋論叢 (十七ノ一、二)  
 文學研究 (第二十五輯)  
 哲學季刊 (第四號)

前 號 目 次

美の批判 (承前) : 文學博士 植田壽藏  
 内證傳達の様式 : ..... 文學博士 石津照隲  
 | 天竺教相論の歸緯 |  
 社會法の性格 : ..... 法學士 磯村 哲  
 | 近代民法と社會法 |